

やまと 民俗への招待

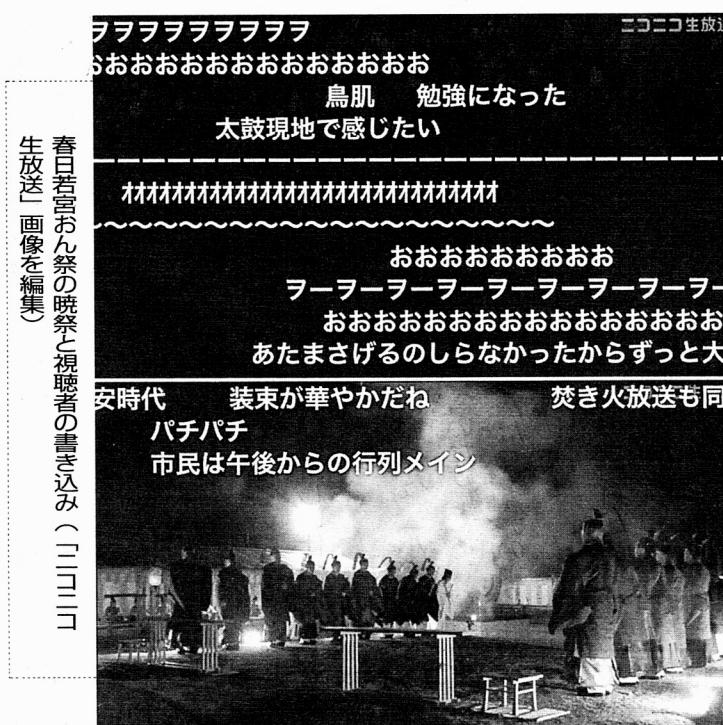
鹿谷 勲

新型コロナウイルス感染症の流行が2年目を迎えた。万葉集「梅花の歌三首」の序文中の「初春令月、氣淑風和」から生まれた令和の3年目は、令和3年となつて私たちの不安を煽り続けている。

この欄もコロナ問題は舞縫ではない。突然現れたコロナ関連の流行語氾濫を、隠語的な性格があるのではないかと指摘した。マスクをつけ細心の注意をして実施された葛城市的調田坐一事尼古神社のオンド行事や、明治12年のコレラ流行を潜り抜けた記念に刻まれた香碑、奈良市の添御縣坐神社の絵馬奉納のことなどを紹介した。

この流行病は終息するまでは何年も時間を要するのでは、と当初から指摘があったが、不可解

コロナと祭り



うものであるが、「歩く・見る」はできるが、一歩も外れ、状況は好転せず、緊急事態宣言が繰り返し発令されている。

な逆向きの施策が講じられ、状況は好転せず、緊急事態宣言が繰り返し発令されている。

民俗学は「歩く・見る」ことによって行い。この感染症は、人体番大事な「聞く」ということを自肅せざるを得ない。この感染症は、人体への攻撃ばかりでなく、人を許さない冷酷さを伴っている。経済活動のみならず、文化的な活動全般ができなくなづ、私たちが対象とする民俗文化にも大きな影響を与えており、全国的に祭りや行事が実施できなくなっている。南は長崎くんち、北はネブタ行事が中止。

こうした中で成り行きを案じていたのが12月の春日若宮わん祭だった。若宮神を御旅所に遷す「遷幸の儀」は大勢が密集して取り廻む「入垣」ではなく、「網垣」によって行われた。例年賑やかな御渡り式は保存会長・日使・大和土願主役の他20名ほどで一の鳥居から

集客力のある阿波踊りは経済活動の破壊、さらに廣範囲にわたって人間的活動を凍結させている。人が集まり喜びを分かち合うという本能的な活動を許さない冷酷さを伴っている。経済活動のみならず、文化的な活動全般ができなくなづ、私たちが対象とする民俗文化にも大きな影響を与えており、全国的に祭りや行事が実施できなくなっている。南は長崎くんち、北はネブタ行方が中止。

一般的の拝観を取り止めた代わりに、インターネットによる動画配信が試みられた。例年夏ごろから打ち合わせが始まり、お渡りや松の下式に多少縮小などが相次いでいる。集落の氏神の祭礼や行事も例外ではなかつた。

こうした中で成り行き所祭を拝観した。暖かい自家で普段着姿で見るおん祭の芸能の数々は、例年に増して力強く迫つてくるよう、不思議な思いがした。動画を見た人も多く、一様に感動したようだった。新たな関心が生まれたのは幸いだつた。本物の賑わいと厳肅さ、伝統のたくましさを現地で実感できるようになつてほしいと思う。

(奈良民俗文化研究所代表) 次回は3月3日